

【体験版】

「……やっぱり、孝史と一緒に開発していきたい」

声は小さくとも、芯があった。

モニターの光が、決意に満ちた瞳を映す。

「よし……じゃ、コンドームを大量に買うぞ」

購入サイトをスクロールする指が、急に速くなる。

どのメーカーの、どの薄さの、どの感触のものを選ぶか。ページを行き来しながら、ふと自虐的に笑った。

「ポルチオ開発用のコンドームとか、売ってないよね……」

苦笑いを浮かべたままスクロールを続けると——目に飛び込んできた。

「業務用コンドーム……！？」

百五十個入りで、わずか二千元。

目を見開いた瞬間、里桜の口元が緩む。

「……よし。これだ」

迷いなくカートに入れ、決済ボタンを押した。

到着は明日。

なら——。

里桜はスマホを手に取り、孝史の連絡先を開いた。

明後日、丸一日を空けてもらえるかどうか。

メッセージの文章を何度も消し、打ち直し、ようやく送信する。

画面を閉じたあと、彼女は静かに椅子に背を預け、天井を見上げた。

心臓が、まだ熱く脈打っている。

明日、届く箱。

明後日、会う彼。

そして——これから始まる、未知の開発の日々。

◇ ◇ ◇

翌々日——。

里桜は徒歩で孝史の家へと向かった。

インターホンを押し、扉が開く。

「おじゃまします」

「うん、いらっしゃい」

孝史の声は、いつも通り穏やかだった。

玄関に立つ彼の姿を見た瞬間、里桜の心臓が小さく跳ねる。

「里桜が朝から来るなんて、珍しいね」

「ちょっとね……」

言葉を濁しながら、彼女は鞆を抱きしめた。

中には、勉強道具と——あの、業務用の箱が入っている。

「きよ、今日はちゃんと勉強道具持って来てるからね」

「分かってるよ。暑かったでしょ？ さあ、入りなよ」

玄関の扉が、背後で静かに閉まる。

それからシャワーを借り、二階へ。

孝史はすでに机の前に座っていた。

二人はいつものように教科書とノートを広げ、勉強を始める。

そして——一時間半が過ぎた。

「ちょっと休憩しない？」

「うん、休憩にしようか」

孝史もペンを置く。

「孝史……お願いがあるの」

ここからが、本番だ。

声が、自然と小さくなる。

「どうしたの？」

里桜は深く息を吸った。

「私の……ポルチオ、開発、手伝って！」

次の瞬間、孝史は盛大に麦茶を噴いた。

「げほっ、げほっ……！」

「大丈夫！？」

「大丈夫じゃないよ！ どうしたんだよ、急に？」

「いや、だってね……前のエッチで、孝史が『ポルチオ開発すると気持ちいい』って言ったじゃない」

「……言った、かもしれない……」

「私ね、自分一人で開発しようと思ったの。でも……やっぱり、孝史にも手伝ってほしくて」

里桜は鞆へ手を伸ばす。

そして――。

あの箱を取り出した。

どんっ。

テーブルの上に、重い音が響く。

孝史の顔が、みるみる引きつっていく。

「そ、それ……何個あるの……？」

里桜は胸を張った。

「百五十個！」

「……………」

孝史は両手で頭を抱えた。

「……引くよ、普通」

「だって、ネットでポルチオ開発って、何回もエッチしないとダメって言ってたもん！」

「それでも、こんなに買わなくても……」

やっぱり呆れているんだ。

でも――せっかくなら。

好きな人と一緒に、この未知の感覚を確かめてみたい。

「孝史……ダメかな？ 手伝ってくれない？」

小さく尋ねると、彼は一度だけ深く息を吸った。

「……うん、わかった」

「えっ？」

「里桜のためだ。付き合うよ」

「ありがとう」

里桜は嬉しそうに、彼の手を握った。

——ここから先は製品版でお楽しみください——

業務用コンドーム、150 個。

勉強道具も準備完了。

そして始まる、二人だけの「開発」の一日。

果たして里桜は、まだ知らない感覚へ辿り着くことができるのか——？